JLreq-Dのモデルとスコープへのメモ

JLreq-Dのモデル—JLreq-originalとの比較

layoutの対象となるモデル（-D、original共通）

JLreqで規定する文字クラスに属する文字を、（ダラダラと）並べたもの。

文字、文、段落、項、節、章、部などの階層構造を持つ。

それぞれの階層レベルと分掌全体とをノードとして、他の文/文章、図版、表へのリンク構造を持つ。

-originalにおけるlayout

基本版面の設計がベース

Margin、行長、行間をあらかじめ設定する。

-Dにおけるlayout

基本的には行長可変のスクロールモデル

一般的には、読者に読まれるタイミングで、ダイナミックに生成される。

その際、読者が設定する（もしくは読者が保持するデバイスの固定長の）矩形の大きさによる制約の下で、読者によって行長と行間が設定される。

イメージとしては、行長と行間が決定されたことによってlayout可能となった巻物（スクロール）を、読者が設定した矩形の窓を通して閲覧することとなる。

基本版面から可変行長スクロールモデルに移行することにより、-originalとは位置づけが異なる組版要件が発生する

行長が可変となるために位置づけが変化する要件

行長が長くなると行末禁則は厳しくなり、行長が短くなると行末禁則は緩やかになる。

したがって、行長への配慮を持たない禁則文字の設定は意味がない。

-originalでは、基本版面における行長を（暗黙裏に）40文字程度と想定していた。

改ページの概念が変化するため位置づけが変化する要件

泣き別れ、辞書における前行への改行など

改ページの概念が喪失することにより、不要となる要件がある。

さしあたりのボトムライン

+-originalの1章と2章に相当する記述を、基本版面モデルと可変長スクロールモデルの比較で記述する。

+抽象化モデルからのスクロールモデルへの変換を重視し、基本版面モデルをそのままスクロールモデルに横滑りさせることは推奨しない。

+一度抽象化モデルに遡ったうえで、可変長スクロールモデルに最適な処理方法を選択することを推奨する。